
私の下僕になりなさい！

ゼロ騎士

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

私の下僕になりなさい！

【Nコード】

N7731X

【作者名】

ゼロ騎士

【あらすじ】

魔術戦争によって魔術師が蔓延るようになったこの世界。

西風 空は聖ヨハネ学院で木霊 夢子の下僕となる（むりやり）。

魔術と天使が空のを巻き込んでいく！

僕は貴方の盾になる！

魔術師、僕らがそう呼ばれるようになったのはかなり昔のことである。対して、その魔術師が公の世界に蔓延るようになったのはここ最近の話。

そして、魔術師達の戦いが始まったのもここ最近の話である。

鳴り響く銃声、燃え盛る建造物、目の前で起こっているのは戦争という名の虐殺。

僕らは只逃げている。死にたくない、生きていたいという思いだけを胸に只、逃げ続けていた。僕らは最初六人だった。それが一人、また一人と死んで今やたったの三人。

ボロボロの布切れを身に纏い只、生きようと逃げ続けるだけの子供。力も無く、行く宛も無い。ご飯は暫く食べてない。少し前に店から缶詰を盗んで三人で食べたのが最後だ。

戦いはいつも夜になると収まる。僕らはいつも夜になると無人の家に行き、そこで寝る。

そんなある日の夕方、僕らは捕まっていた。

周りには魔術兵（魔術師であり軍人でもある人）が大勢、僕らは殺されるのかと諦めていた。その時だった。

空から一筋の光が差し込んだ。

そして、それと同時に魔術兵は一斉に倒れ、僕らは助かった。空には六つの翼を持つ女性が神々しい光を放っていた。

それは僕が最初に見た天使の姿だった。

あれから五年。僕は聖ヨハネ魔術学院高等部の生徒となっていた。

十年前に起きた第一次魔術戦争は魔術師の質と量、どちらも優れていたEU連合国の勝利で二年前に収束し、戦いに敗れた中華連邦はその領土の半分をEU連合国に献上することとなった。

それから二年、世界には魔術を扱う人間が半数を超え、国際軍事連合軍が世界魔術法条約を出した今、我らが日本でも、いや世界的にも魔術師は普通の人間と何ら変わらない生活を送っている。

そして今日は記念すべき僕らの入学式。春の門出に胸を躍らせ、まだ真新しい制服に身を包み、僕は聖ヨハネ魔術学院の校門を潜った。はずなのだが…、

「どうしてこうなった」

僕はあまりに理解不能で怪奇的な状況に、一人そうぼやいた。何をどうすれば校門を潜ってすぐに見るからに偉そうの女の子にこんな誰も居ない部屋に連れてこられるのだろうか？

「ふふふ、この素晴らしい日に良くぞ来てくれた！」

いやいや、自分拉致られて此処に来たんですけど…。ていうか何？この子もしかしてかなりイタい子？

「こらそこ！ 初対面でイタい子とかそういう扱いするな！」

目の前の少女は頬を膨らませ此方を睨んでいる。

「と、とにかく！ 私は夢子、木霊夢子よ。二年A組の副会長をしてるわ」

少女は咳払いして自己紹介をした。頬が少し赤くなっている気がする。

「僕は西風空にししかぜうつらつています。1年です」

「うつほ？うつほってどういう字を書くの？」

先輩（自称）は僕にそう聞いてきた。

「自称は余計よ、ていうか君！ 年上相手に少し毒いよ？」

さつきからこの先輩はよく僕の心を読んでくるな、僕のプライバシーは何処へ？

さてさて、流石にこれ以上この先輩を苛めるのは少し可哀想なので自重しよう。魔術師は見た目で判断しては痛い目を見るからな。

「えっと、空って漢字一文字で空くうって読みます」

先輩は「へえ」と感心している。そして僕の制服のネクタイを掴み、「じゃあ君はクウね！ いい、クウ？」

よくないです、勝手に人のあだ名決めないでください。苛められたらどうするんです？

「その点は安心しなさい！ この、やれば出来る子夢子ちゃんがいじめっ子達をやっつけてあげましょう」

やれば出来るって、それは身内が努力しない人に対して言う台詞ですよ…。ていうか、

「ネクタイ離してくださいよ、苦しいんですけど」

「ヤダ」

即答だった。いや少し被って言われた気もする。

「だってまだやることやってないもん」

やること？ 一体何のことだろうか？

その刹那。先輩はネクタイを引っ張り、顔を近付けてくる。

そして…、

「契約の元、汝を我が僕とする」

唇を奪われた。しかも、舌まで入ってくる。先輩の唇は柔らかく、仄かに甘かった。

いや、それだけではない。舌と共に彼女の魔力が僕の体内に入り込んでくる。それは魔術師が行う契約の方法の一つだった。魔術師は自分の僕とする相手に魔力を飲ませると聞く。

そして、暫くして先輩から解放された。

「はあ、契約終了！」

彼女はそう言っ、部屋の隅にあるソファに座った。僕は暫く何が起こったのか、わからなかった。

「な、何をするんですか!？」

僕が先輩にそう訊くと、

「あ、ごめん、初めてだった？」

と、軽く言った。いや確かに初めてだったけれども…、

「そうじゃなくてですね、だいたい僕の了承もなく契約ってどういうことですか？」

「悪いとは思っているわ。でも私にだって時間が無いの、わかってもらえる？」

先輩はそう言って髪を剥いた。クリーム色の癖っ毛は形を変えずくると跳ねる。

「時間が無い…？」

「ええ、ウチの高校では主従関係が基本なの、だから一年間、主も下僕もないような生徒は強制的に退学になる。そして私は去年、とある男の手によってやっと見つけた下僕を殺された」

「え？」

殺された？どうして？

「いい？ 主従関係を結ぶってことは衣食住を共にするということ、いわば伴侶なの。しかも主は自分の僕に大抵の言うことを聞かせることが出来る特権を持っているの、だから中には主従関係を結んで自身の性欲を満たそうっていう下種な輩もいるわけ。」

「ていつてもそれを防ぐためにある一定以上の命令には僕が拒否権を発動することが出来るようになったんだけどね」

先輩はそう言って、ソファーに寝転がる。

「でもってそれを利用してしようとしたのか、それ以来その男は私にしつこく僕になれと言ってきた。まあもちろん蹴ったけど」

なるほどそういうことか、つまり彼女にとって僕を作るといふのは校則を守るとともに、その男から自分を守ることになるということか。

「そろそろ来るわね、いい？ 貴方の役目は私を守ること」

はあ、入学式の前にどうやら面倒ごとが出来たらしい。

「あと30秒すれば一人の男が入ってくる。その男を殺しなさい！」拒否権が発動できない、ということは殺すことを含めて言うことをきかなきゃいけないのか。正直殺したくないんだけどな。

そして先輩の予告通り、一人の男が入ってきた。

「決めてくれましたか、夢子君？天使の器になるということを」
入ってきたのは胸元に？の文字が入った模範委員会のワッペンを付けた、眼鏡を掛けた男だった。僕はそれが何を意味するのかを知っている。

「天宮…十二師…」

天宮十二師、魔術教会公認の十二人の魔術師。そして彼らは必ず天使を一体使役することが義務付けられている。

男は僕を見てこう問うた。

「誰ですか、君は？天宮十二師の名を軽々しく口にしないで貰いたい」

「彼は私の下僕よ、私にはもう下僕がいる。だから残念だけど貴方の下僕にはなれないわ」

先輩は冷や汗を流しながら、そう言った。

「そうですか、ではまた消えてもらうしかありませんね、『セラフイム』！」

彼がそういうと一本の白い剣がその手に握られていた。

殺される、殺される。このままじゃ確実に殺される。どうしてこんな人生なんだ。まだ二年しか経ってないのに、まだまだこれからなのに、どうして巻き込まれる？

「安心してください、痛いのは一瞬だけですから」

男はそう笑って、襲い掛かってきた。死にたくない、死にたくない、死にたくない。

そうだ、死ぬわけにはいかないんだ

「？ どういうことですか、これは？」

僕の周りには無数の剣が、僕と夢子先輩を守るように盾となっていた。

「嘘、これって、投影魔術？」

投影に見えるこの魔術、これは僕の魔術だ。僕のできる唯一の魔術、召還術だ。

僕の魔術は特殊で召還できるのが武器だけとなっている。

「投影？ バカな今年の入学生に投影魔術の使い手はいなかったはずです」

相手は予想外の魔術を見て、相当驚いているようだ。

そもそも投影と僕の召還術では根底が違う。

投影は武器そのものを作り出すが、僕は武器を呼んでいる。だから武器の形状に左右されず、元々のステータスのままいかなる武器であろうとも召還できる。

「まあいいです、次に会うときは死んでもらいますよ」

そう言っただけは消えた。そして僕は魔力が切れ、その場で気を失った。

起きるとそこには見知らぬ天井があった。

「やっと起きた？」

夢子先輩がベッドの端に座っている。どうやら保健室のようだ。

夕焼けの光で保険室内が赤く染まっている。かなり長い間、ここにいたらしい。

「先輩、どうして…？」

僕は正直先輩が此処にいることが驚きだった。てっきり今回の一件で主従関係は終わりだと思っていたのに…。

「どうしてって、決まってるじゃない。自分のペットの面倒くらい自分で見なきゃいけないでしょ？」

「ペット扱いかよ…。」

「別に下僕にするなら僕じゃなくてもいいじゃないですか。そこいらの生徒のほうが優秀ですよ？」

僕が拗ねた様に言ったので、先輩は腕組みしてこう言った。

「天宮十二師を追い払った奴の言う台詞じゃないわよ、それ？」

「本当のことを言ったままでですよ。大体、何で僕なんですか？ 他にもいつばいい生徒がいたでしょう？」

僕は率直に質問した。すると先輩は頬を赤らめた。

「それは…その…、ええい！ 面倒くさい、一度しか言わないからよく聞きなさい！ 下僕」

先輩は立ち上がった僕のことを指差した。

「私は、その…、私は、あなたの事が好きなのよ！」

僕の何気ない質問の答えは、途轍もない事実で返ってきた。

「はい？」

多分僕のその一言はとても間抜けな声だったと思う。夢子先輩は真っ赤になって目を背けている。

「だから、あなたのことを一目見たときから、こうなんていうかキユンとしたというか、なんというか…、とにかくあなたのことが好きなの！」

先輩が小さな声でそう言うと、保険医の女の先生が入ってきた。

「お前ら、そういうのは外でやってくれ、訊いてるこっちが恥ずかしいから」

先輩はどうやらこの先生の存在を完全に忘れていたらしい。耳まで真っ赤にして目には涙が浮かんでいた。

そして僕らは保健室を出て、さっきの部屋へと戻ってきた。

「はあ、人生で一番の赤っ恥だわ」

先輩はソファアに座り、少し遠い目をしていた。

「先輩」

僕の呼びかけに先輩は今にも泣きそうな顔で振り向いた。

「もういいわ、さっきのは忘れて」

「僕は先輩の気持ち嬉しかったです」

僕は先輩の言うことを無視してそう言った。いや勝手に口にしていいた。

「僕は、自分に自信がもてないし、知能も魔力も低いような至らな

い男ですが、これからよろしくお願いします」

僕は微笑みながら先輩に手を差し出した。

先輩は笑顔で答えてくれた。

「ええ、私を守って、空！」

僕は貴方の盾になる！（後書き）

次回予告

空の噂を聞きつけ、狩人と呼ばれる魔術師が空の前に立ちはだかる。果たして空は狩られるのか？ はたまた狩り返すのか？
次回、その名を狩人！

その男、狩人！

僕の学校は全寮制で、学院側の規則で僕は夢子先輩と同じ部屋で生活することとなった。最初は若い男女が一つ屋根の下というのは少しどうかと思うが、僕も夢子先輩もそのようなことをするなんて考えられないし、とりあえず了承することにした。

が、その期待はその日の翌日、つまり今現在打ち砕かれてしまった。

何故だ、何で夢子先輩が僕のベッドで寝ているんだ？しかも裸で。おかしい、昨日夢子先輩は僕の隣の部屋に寝ていたはずだ。まさか寝ぼけて…。なんてこつたい。僕の部屋の間取りと先輩の部屋の間取りはほぼ違いが無い。つまりこの状況で夢子先輩が起きたら確実に誤解される。そうすればこれからの信頼に関わってくるということにも…。それだけは絶対に避けなければ。

さてこの幸う…いや、この状況をどう打開する？やっぱりこつさり抜け出すべきだろうか？

そう思い、ベッドから降りようとしたその瞬間、夢子先輩に腕をつかまれた。

腕に柔らかく少し弾力のある膨らみの感触がある。見た目でも大きいほうだったが触ってみると…って違う違う、今考えるべきはこの状況を打開すべき手段、方法だ！

ここでそれが思い浮かばなければ大変なことになる。どうすればいい？どうすれば…。

そんな事を考えていると先輩が目を覚ました。先輩は僕の腕を離し、ゆっくりと起き上がる。僕は先輩の裸を見ないように後ろを向いた。

「おはよう、クウ」

眠たそうな声で先輩は言った。

「おはようございます、夢子先輩」

「どうしたの、クウ？ 私の方を見てよ」
体が勝手に動く、まさか命令権の行使！？まずいこれはまずいぞ。

「その前に服を着てください！」

拒否権と共にその言葉が口から発せられる。しかし、気付けば後の祭り。

「え？」

そう言っただけで先輩が自分の体を見ている姿が見える。つまり、拒否権の発動が間に合わず、先輩の柔肌を見ることがなくなってしまったのだ。先輩の顔が徐々に赤くなっている。と共に彼女の顔には怒りの表情が……。

「クウ？ 怒らないから説明しなさい？」

既に怒ってらっしゃるのに何をおっしゃるウサギさん。

「えっと、そのですね。朝起きたら先輩が隣に寝ていてですね、そんないやらしいことは一切してませんよ？」

と言っただけでこうなった

「空のバカー！」

朝から僕達の住む部屋にはスパーンといういい音が鳴り響いたのであった……。

「少し位そういうことでもいいのに」

先輩が何か呟いていたが、先輩の一撃を食らって伸びている僕には一切聞こえなかった。

「はあ、まったく次からは気を付けなさい？」

「はい」

僕は寮から学校に向かう間、先輩から説教を喰らっていた。周りには同じく登校中であろう生徒が多数歩いていて、その中の数名が此方を見てひそひそと話している。

「気にすることはないわ、貴方の実力が認められた。ただそれだけのことよ。だから気に掛けなくていい、むしろ誇りに思いなさい」
夢子先輩は僕に小声でそう諭す様に言った。

「は、はあ」
僕は腑抜けた返事で返した。

学校に付くと先輩は学科が違うのですぐ別々になってしまった。僕は玄関近くにあつた案内板を頼りに自身のクラスへと向かう。その間の何人かの生徒が僕を見てくすくすと笑ったりなどしていた。それを気に掛けて無いかのように振舞っては見せるがやはり少し不快感が残る。

そして何故、皆がそうするかということとはクラスに着いた瞬間に理解できた。

僕がドアを開けてクラスに入ると皆静まって、一斉に僕の方を向く。

「もしかして、お前が西風か？」

クラスの男子の一人が恐る恐る僕に問う。僕は頷いて見せた。その瞬間、

「おお！ 皆、名の無きサーヴァント『西風 空』が着たぞ！」

と、僕に質問した男がそう言った瞬間、クラス中がワツと沸いた。

「おお、お前がああセラフイムを一撃で退けたという西風か！」

「既に主がいるんだろ？」

「主との初夜はどうだったんだ？」

「可愛い、私結構タイプかも」

などと結構いろいろな事をワイワイ言っている最中、一人の女性とが手を叩きながら近づいてきた。

「皆さん、ちょっと退いて、退いて下さい、ちょっと誰ですか今お尻触ったの、はいはい、退いてください」

と生徒の大群を掻き分け一眼レフカメラを首から提げた背の低い女性に近づいてきた。身長は大体中学生二年生くらい

「どうも写真部の米原といいます、以後お見知りおきください」

そう名乗って米原は胸ポケットから名刺を取り出した。僕はそれを受け取って、鞆の小さなポケットの中にしまった。

「うーん、顔は可愛い系、少し撫肩ぎみでいて平均的な体つき、今の学生にしては遊んでいるようにも見えない真面目そうな見た目、ふむふむ」

米原は僕を四方八方からみてメモ帳になにやらいろいろと書き記していく。

そして、それを切り取って宙へと投げると

「頼みましたよ、私の大事な記事」

と行って、周りに魔方陣を形成すると、一つ目の小さな使い魔が具現した。その使い魔はメモを掴み何処かへ飛んでいってしまった。「勝手に記事にしてすみませんでした。ですがあのようなビックニュース、新聞部としては記事にしないわけにはいかないものとして、学校全体に昨日の一件が知れ渡ってしまいました、その点はお許しください」

流石は記者と言ったところだろうか。礼儀正しいというか、律儀というか、とにかく相手に不快感を与えない話し方をする。

「そういうことだったんだ、それなら気にしてないよ、でも次からは僕か夢子せんぱい…僕の主に了承を取ってくれると嬉しいな」
僕がそういうと後ろから声がした。

「ちよつといいかい？ 教室に入れないんだけど」

僕はそう言われてすぐさま、

「ご、ごめん、すぐ退ける」

僕はそう言って後ろを向いた。そして僕の後ろにいた男子生徒は僕を見るなり、

「分かってくれれば…ってお前、空か？」

と訊いてきた。その少年は銀色の長い髪を後ろで一本に結って眼鏡を掛けている僕より少々身長が高い男子だった。そして僕は彼を知っている。

「東、時野森 東じゃないか。同じ学校だったんだ」

僕が東と呼んだ生徒は時野森東。彼とは戦争が起こる前からの知り合いである。

僕は昔からの知人に会えた驚きと嬉しさから思わず彼の手を握っていた。

「はあ、鬱陶しい」

東は溜息交じりそう言った。普通に考えれば考えられないだろうが、彼がそういう風に言うときは決まって本音がその逆のときだ。つまり彼なりの照れ隠しである。

「とりあえずクラスの中に入ろう、此処は邪魔になる」

東の提案で僕らを含めた全員がクラスの中に戻っていく。

それから暫く、僕と東は戦争が終わってからどうしていたか等の話をした。

そして昼休み、僕はクラスの皆に誘われ屋上に来ていた。

「ええ今回は私、藤林主催、西風空君の祝勝会を行います！」

幹事を勤める男がそういうと皆、拍手喝采で盛り上がる。周りには購買のパンやお菓子、弁当などが広げられている。

「ではでは空君、乾杯の音頭をよろしくお願いします」

はい？乾杯の音頭？

「え、ちょ…聞いてないよ？」

「いいからいいから」

僕はこうして知らされてもない音頭を取らされることとなった。

「ええっと、それじゃあ、乾杯！」

「…「かんぱーい！」」「」

僕の音頭に乗って皆が一斉に叫んだ。

「はあ、君の大変だな」

「君の気遣い、痛み入るよ」

嫌味交じりに言ってくる東に僕も嫌味交じりで返す。僕は近くにあったパンの袋を開けて頬張る。

「そういえばいつ以来だろうな、こんなに騒ぐの」

「そうだね、暫く戦争や疎開で全然だったし、でもまあ楽しいからいいじゃんか」

「そうだな」

僕と東は缶のオレンジジュースで乾杯し、一気に飲み干した。

その後、僕はクラスの皆とメールアドレスを交換した。

そして僕は東に言われ、皆より一足先にクラスへと帰ってきた。

クラスには一人の男が待っていた。

「遅かったではないか。西風空」

その男は教卓に腰掛け、ブラウンに染まった髪を手串でといた。

「誰だ、あんた」

僕の問いかけに男はニヤリとして、

「狩人、貴様の首が欲しくて参じた次第だ」

そう答えた。その瞬間、男の体から魔力と殺気が溢れ出る。物凄い殺気だ。既に額から冷や汗が流れてきた位だ。

「決戦は今から中庭にて行う」

何か言い分はあるかと男は付け足した。僕は首を横に振った。

「で、申し出を受けたと？」

夢子は少々怒り気味で空に言った。理由は簡単だ、魔術師の戦闘には必ず主人と下僕が揃っていないといけないから、それに乗っ取って中庭という目立つ場所での戦闘を強いられたからだ。

「はあ、しょうがないわね。まあ相手があの狩人じゃあ断ったところで無駄だろうし、今回は許しあげるわ」

今度は呆れたと言わんがばかりの顔でそう言う。

そんな風に言われている空に対して、相手の狩人という男の下僕は静かだ。緑交じりの黒い短髪で服装も制服ではなく黒のスーツ姿をしている。身長は狩人より頭一個分少ない。

そして、狩人は両手を大きく広げて干渉している全校生徒に言った。

「諸君、これより我が狩りの時間を始める。本日の獲物は西風空、あのセラフイムに見事勝利を収めた優秀な生徒である」

その瞬間、空は焦り始めた

「ちよ、僕は…」

が、ここまで言ったところで狩人の演説に掻き消される。

「では本日の狩りを始める、諸君楽しんでくれ！」

空は心の中でそれは違うと連呼した。

「何か言いたいことはあるか、空？ 死しても良いよう、友に伝えたいことを述べよ」

そして狩人が高らかな演説の最中、空はあろうことが、

「僕は、セラフイムに勝ってない」

僕はそう呟いた。

「何？」

「僕は、セラフイムに勝ってなんていないんだ。まぐれなんだ、彼が途中で逃げただけだ」

空の言い分を聞いて狩人は、

「ふざけるな！ 勝利していない？ 相手が逃げただけ？ では貴様の言う勝利とは何だ！？ 述べてみよ、西風空！」

怒りを露にして叫んだ。空はその豹変した狩人の姿を見て恐れを抱いた。その姿はメスをやられたオスの獅子のようだった。

「相手が逃げ出せば、それは自らの勝利だ、相手が戦う意思が無ければそれは自らの勝利なのだ！ それを貴様は違うというか、間違っているか、そういうのか？」

彼は空に一步一步近づきつつそう述べる。

「興ざめだ、貴様ほどの強者がそのようなことを言うなど言語道断！ 道を改めよ！」

「そこまで言う必要は無いんじゃない、狩人？」

怒りが今にも頂点を超えようとしている狩人に夢子は軽く言った。狩人は夢子を見て鼻で笑った。

「ふ、女狐が。こやつはここにいる殆どのものが成し得なかったことを否定したのだぞ？ これでも抑えているつもりなのだが、所詮天に恵まれた才の女狐には分かりえぬことであつたか。もうよい、

貴様は控える、王の神聖な狩り場に立ち入るではない！」

「いい加減にしる。その首、そぎ落とすぞ？」

空の体は何故か思考するより先に動いていた。空は腰から取り出したナイフを狩人の首元に当てた。

狩人は後ろに跳び距離を離す。

「よい、では死合おうぞ。下僕、私のサポートは任せたまぞ」

そう言いながら狩人は魔方阵から一本の長槍を取り出し構えた。

それを見て夢子が空に命を下す。

「任せたまよ、何が何でも勝ちなさい！」

「承諾、必ずや貴方様に勝利を、my master」

空も自身の周りに魔方阵を展開して戦いの準備をする。

狩人がジリジリを足をすり間合いを取る。

「では行くぞ！」

その瞬間、狩人が地を蹴る。彼は大地を穿つ反動で空との距離を一気に詰める。

空はギリギリまで槍を近づけ、槍の間合いの少し手前で魔方阵から剣を取り出して、槍を受け流しつつ違う魔方阵から別の武器を取り出し投げつける。

狩人はそれを槍の石突き（矛の逆の部位）で跳ね除け、右足を引きそのまま連激を繰り返す。

その斬激の風圧で地面は抉れ、芝生は吹き飛ばす。

空はその連激を全て受け止め、受け流す。

「あの男なかなかの槍使いだ。まるで隙が無い。」

東が空の戦いを見てそう感心している。確かに狩人に隙という隙はまるでない。長槍をまるで二本の短槍かのように扱うその舞いは見ている誰しもが美しいと思うほどである。

空は一度体制を立て直すために後ろに下がる。しかし、

「そつちへ行くのは失策だぞ？」

空の動きを先読みした狩人は、空を追う。空の回避速度より狩人の突撃速度は断然上を行っていた。狩人の矛が空の体を貫こうとする。

が、

「残念だが、その攻撃は想定内だ！」

空ニヤリとして、狩人の周りを一斉に魔方陣を展開し、武器を召還し放つ。対する狩人も空の心臓を貫かんとするが空は後ろに倒れ避ける。

空は心の中で勝利を確信した。が、狩人は召還された武器を落とせる限る落とし、致命傷を避けた。

「なかなか勝たせてはくれないものだな」

空は内心舌打ちをした。

『この男、かなりの使い手だ。魔術を使わずに此処までやるとは流石に狩人を名乗るだけはある』

空は次に攻撃に移る。魔方陣を大量に展開して、投げ続けた。

狩人はそれを致命傷となりゆるものだけに限り落とし後は避けきる。

「攻めが甘い！」

狩人は空の攻撃の合間を縫って突き進む。

「貰った！」

狩人は槍を薙ぐ。空はそれを受け止めた。その時、狩人が数を数え始めた。

その意味は空がよく知っている。

「ジャスト五秒だ！」

狩人の宣言と共に空が地面を蹴り宙に舞う。

「読めたぞ、貴様の投影は五秒間しか持たぬのであろう？」

空は苦虫を潰したような顔をした。魔術師にとって魔術を見切られるというのは致命傷。未だに召還魔術ということはバレてはいないがそれも時間のうち。早々にけりが着く事になるだろう。

その時空は一つの決断をした。

「先輩、魔力共有の許可を！」

夢子は待つてましたと言わんがばかりの顔をした。

「ええ、存分に使いなさい！ 我が下僕！」

その瞬間空は大型の魔方阵を展開し、その中から一本の光り輝く一本の剣を抜いた。

「フリュンヒルト魔を滅す天空の聖剣！」

空はその剣の名を言った。これが空の真の術式。名を言うことでその武器を具現させる術式。

空は中段に構えて、狩人に言った。

「悪いがこの勝負、早々にケリを着けさせてもらおう！」

その男、狩人！（後書き）

次回予告

術を見破られた空は「魔を滅す天空の聖剣」を手にとった。

同じく狩人の自身の真槍を取り出すが、戦いの結末はいかに……。次回、勝利の果てに得たモノ！

勝利の果てに得たモノ！

「魔を滅す天空の聖剣？ ヴァルキュリアの名を持つ聖剣だと！？」
東は空の召還した剣を見て驚いた。

「何かまずいのか？」

男子生徒の一人が東に問う。

「あの剣はそもそも神話に存在しないものだ、名の由来は愛憎の皇女の名で相違ないだろう。が、ソレを武器として召還したということとは、あのバカはその伝承そのものを具現化したことになる」

『何を考えているんだ、あのバカは』

東は心の中でそう毒づいた。

「魔を滅す天空の聖剣。戦いに己が命を掛け、裏切りに身を滅ぼされた皇女の聖剣を投影したところで何の意味がある？」

狩人はそう言いつつも今までの空と違う動きに少々驚いていた。てつきり時間制限があるものなのだと思っていた術式が武器の名を読んだだけでそのデメリットがなくなるということまでは想定が着かなかった。

「まあよい、貴様が本気を出すというなら我が真の武器を特別に見せてやるう」

狩人はそう言つて、今まで持っていた槍を消滅させ、自身の周りに赤く輝く魔方陣を展開する。

そして一本の黒い剣と一本の白い剣がその姿を現した。

「喜べ、一年風情で我が牙を見たのは貴様が始めてだ」
双獅の牙と呼ばれる双剣。その名の由来は狩人の持つ幾多の武器の中で最強にして強靱を誇る二本の剣。その双剣が逆手持ちされることから狩人の牙のように見えるというものである。

「では、参るぞ！」

先に動いたのは空だった。中段から下段に構えなおし大地を蹴る。

掛け声と共に魔力による加速で空中を駆け進む。

剣の間合いの内に狩人が入ると空は剣を横に一閃した。しかし狩人はその攻撃を白剣で受け止めた、かのように思えた。しかし空の剣は狩人の剣をすり抜けた。

一瞬の判断で回避した狩人だったが、あの距離からでは無傷とはまではいかず、左肩を剣が掠めた。

「なんだ、何が起こった？」

あまりに奇想天外な攻撃に頭が付いてこない。分かっているのはあの剣が剣をすり抜けたということだけ。それ以外は何一つ分からず、あまりに理解不能だった。

だが、空の攻撃は続く、無限の乱舞、永遠の剣戟、受け止めることは適わず、故に避けることしか出来ない。しかし、無限に続く乱舞の全てを避け続けることは不可能。

更に空が先ほどまで使用してきた魔術、『アンウィンド・アサチ剣戟乱舞』までもが追加され、避けることも防ぐことまでもが不可能。

「狩人、お前が此処で敗したと認めれば命までは取らぬぞ？」

狩人は晒った。狩ろうしていた小鳥がまさか幻獣の類であることに気付けなかったことを。そして、己が未熟さを。

「私の負けか…。よい、それもまた悪くない」

こうして狩人と空の対決の決着が付いた。

僕が教室に戻ると皆が僕の方へとやってきた。

「すげーじゃん、お前。あの狩人を倒すなんて」「これでまた、西風の伝説が増えたな」

伝説って、そんな大儀なものにしくなくても…。

「皆ありがと。でもごめん、魔力が残ってないから、今日は早退するよ。もう立っているので精一杯なんだ」

あの戦いは危なかった。先輩から魔力を借りれたから良かったけど。普段の僕なら確実にあの戦いは負けていた。

いつか、あの狩人を自分ひとりの力で倒せるようになりたい。

寮に戻ると先輩が待っていた。

「お疲れ様、相変わらず燃費が悪いわね、クウは」

がんばった下僕への第一声がそれですか。まあそのとおりだけど…

…。

「すみません、先輩の魔力かなり使っちゃいました」

先輩は僕の方へ来て言った。

「気にしないでいいわ、内緒にしてたけど、私魔力量はEクラスだから、これのおかげでね」

そう言っただけで先輩がポケットから出したのは小さな石だった。それもかなりの量だ。

「これは月の石よ、父さんから貰ったの。これ自体が魔力の塊だから魔力に関しては気にしないでいいわ」

先輩はそう言っただけで笑った。その表情はとても可愛らしく悪戯っぽい。

「自己紹介が途中だったわ、私は「月の巫女」木霊夢子、改めてヨロシクね、下僕」

夜、大抵の生徒が寝静まった頃、学園内に内接する一つの屋敷の一室。

「ほらほら、これがいいんでしょ？ バカみたいに喘いじゃって、クスクス」

一人の女生徒が自分の僕を辱めていた。椅子に座っている彼女はその白くて細い足で男子生徒を踏みつける。

「まったく汚らしい豚ね、ほらもう限界でしょ？ さっさとその薄汚れた欲望をぶちまけなさい！」

彼女の声に反応してか男子生徒は言われるがまま、なされるがまま絶頂した。

すると、執事服を身に纏った男子生徒が一つの書類を持ってきた。「ミチルさま、頼まれていた資料が届きました」

満ちると呼ばれた女性とは、まだ幼さが残る少女だった。しかしそ

の可愛らしい顔に浮かべている表情は欲望へと誘う小さな悪魔のようだった。

「ありがと、下がっていいわ。私はもう少しこの玩具で遊んでからいくから」

『西風空、貴方はこのミチル様のものよ、ふふふ』

勝利の果てに得たモノ！（後書き）

次回予告

狩人との勝負に勝った空はいろいろな人物から一目置かれる存在となった。

そんな空の生活を脅かす恐ろしい魔の手（仮）が今動き出す

次回、新聞部の野望？！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7731x/>

私の下僕になりなさい！

2011年10月26日11時09分発行